

広島で心に刻んだこと

8月6日の朝、平和記念公園に着くとすでに多くの人々が列を作っていた。国外から集まった参列者たちが並ぶ姿を見て、国や言葉は違っても「平和を願う思い」は共通なのだと感じた。列はとても長く、蝉の声が遠くから聞こえ、少し汗ばむ夏の朝の空気が肌に触れる。たくさんの人が話すだけで誰もがこの日を大切に思っていることが伝わってきた。空はよく晴れ、柔らかな朝の光が木々を照らしていたが、その静けさの奥には重い歴史が横たわっていた。少し式典に遅れてしまい、僕達は黙祷からの参加となった。目を閉じると、80年前のこの時間に原爆が落とされたのだと改めて実感し、鳥肌が立った。夏の朝の光が差し込む中、その直後に起きた閃光と熱、崩れ落ちる建物の音が、まるで今にも聞こえてきそうだった。目の前に見えない記憶が鮮明に蘇り、胸が苦しくなった。呼吸が浅くなり、時間がゆっくり流れるように感じた。周りから聞こえる蝉の声も、この瞬間だけは遠く霞んで聞こえた。続いて、子どもたちによる「平和の誓い」が行われた。マイクを通して聞こえる声は、少し聞き取りづらかったが、その一言一言には強い意志が込められていた。前をまっすぐ見つめ、一人一人が自分の声を紡ぎながら、平和を作り上げていくと語る姿に胸が熱くなった。まだ幼い彼らが背負う歴史の重みを感じ、その純粋な思いに僕は心を打たれた。

式典後、原爆ドーム前に立つと、崩れかけた壁とおき出しの鉄骨が、静かに訴え続けているように見えた。あの日から変わらず、二度と繰り返してはならないという強いメッセージを放っていた。そこに立つ人々もそれぞれの思いを胸に静かに目を向けていた。その後、原爆資料館を訪れた。館内は静寂に包まれ、当時の町の模型や写真が展示されていた。爆心地周辺が一瞬で廃墟になった様子が模型でわかりやすく表現されており、衝撃を受けた。被爆直後の人々の写真は、見る者の心に深く響いた。焼け焦げた学生服や溶けたガラス瓶、黒く変色したお弁当箱が並び、その一つ一つがかつてここにあった日常を物語っていた。そこに刻まれた名前や年齢を見るたび、数字ではなく一人一人の人生があったことを強く意識させられた。僕はその場に立ち尽くし、過ぎ去った時間の重みを感じた。特に心に残ったのは、「助けて」「水をください」という短い言葉と、動く気力もない母親の胸にすがる幼児の姿だった。その言葉に込められた恐怖や絶望を想像すると、胸が締め付けられ、涙をこらえるのがやっとだった。歴史の中の出来事としてではなく、今もどこかで繰り返されかねない現実として、重く迫ってきた。今回の体験を通じて、「知ること」と「感じること」の違いを痛感した。

これまで僕は原爆や戦争の悲惨さを知識として学んできた。しかし現地で被爆者や子どもたちの言葉を直接耳にして、その場の空気を感じたことで、それが初めて、心の奥に深く刻み込まれた気がした。記憶や資料だけでは届かない感情が、現地の空気とともに胸に流れ込んできた。家に帰ってからも、耳にはまだ蝉の声が残っていた。資料館で見た写真や遺品の数々が、何度も脳裏に浮かんだ。それは一瞬の出来事で奪われた命と日常の重さを静かに訴え続けていた。もし自分が80年前のあの日に生きていたとするならば、何を感じ、どう行動できただろうか。考えれば考えるほど、答えは出ないが、忘れてはいけないという思いだけは確かだった。そして、その思いを次の世代へと手渡していくことこそが僕達にできる「小さな平和への第一歩」だと思った。この学習を通して僕の中で何かが静かに変わったような感覚があった。これから僕はこの経験を周りの人々に伝え、「小さな平和への第一歩」を踏み出していきたい。